男の催眠術に掛かって犯し尽くされ、意識を失ったキャロンは、復活した夜の女王サラによって捕らえられ、鏡の魔物が記録した過去の自分の痴態を見させられながら、刺青のような蛇の魔物『這蛇』によって犯される。心と身体両面から凌辱され、サラの嘲笑の中、幾度も絶頂に果ててしまうキャロン。凌辱の夜はまだ明けることがない。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、もう、ゆるして……おねがい……これ以上、されたら、あたし、もう、こわれちゃう……はぁっ、はぁっ、あ、ふぅうっ……」

「どう？気持ちよかったでしょう……今の貴女、すごく淫らで綺麗よ……じゃあ、そろそろ蛇に本気を出してもらうわ……ねえキャロン、貴女まさかその蛇が這うことが出来るのは肌の上だけ……なんて思っていないわよね？」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……えっ……う、うそ……そんな……」

予想外の言葉に荒い息を整えていたキャロンの赤らんだ顔が一瞬で青くなる。蛇たちが自分の陰唇を掻き分け、我先にと大挙して頭を突っ込み、犯しながら膣内へ入ってくるという最悪な光景が脳裏をよぎったのだ。しかし、その予感は的中してしまう。

「あらあら、意外だったのね？それは残念。この蛇はね、膣壁や胎内も自由に動けるの。アソコやお尻の中はもちろん、尿道にだって入れるわ。凄いわよ……ナカでこいつに動かれるとイキっぱなしになるんだから……身体の穴という穴を全て犯す凌辱は触手や牡のモノじゃ絶対経験できない究極の魔悦よ。ふふふ、貴女を快楽の底なし沼に沈めてあげる」

サラが愉悦を隠そうともしない笑顔で、自身のお腹を擦りながら言う。キャロンは恐怖にかられて身を捩るが、両手を拘束している触手はびくともしない。逆に、太ももを這っている蛇の鱗に内腿の敏感な所を擦られ、ぴくんと身体が跳ねてしまう。

「ひいっ……い、いや……お、お願い、止めて、許して……ひっ、あ、あ……」

震える声で懇願する少女。しかし、その願いを聞く者はどこにもいなかった。

「ダメ。許してあげない……その蛇はあたしが手を加えた特製だから、動くだけじゃなくて、幾つか仕掛けがあるんだけど……ま、それは体験すれば分かるわ。サービスで貴女の胎内もそこで浮いている鏡に映しておいてあげる。じゃあ、映像も特別過激なものにしてあげるから、肌に寄生する蛇の凌辱で思う存分イキまくって、堕ちなさい」

「や、やだ、来ないで、来ちゃ嫌、嫌だ、それだけは嫌ぁっ……！」

その言葉を合図に蛇達が股間をめがけて少女の肌で蠢き始める。キャロンは悲鳴を上げ、せめてもの抵抗をしようと肢を閉じて膣口を締めようとするが、そもそも厚みを持たない蛇に対し、それは全く意味のない行為であった。

「あぁっ、許して、ゆるして！あぐ、んぅぅっ、いやっ、そんなに一度に入れられたら、あたしが、あたしがあたしでなくなって、消えちゃうっ……！」

「言っておくけど、簡単に壊れたりしないでね。面白くないから」

サラの言葉に反応する余裕もなく、最悪の予感に震えながら泣き叫び続けるキャロン。我先にと膣口に潜り込み、尿道と陰唇を這う蛇の鱗の感触にぞわぞわとした感覚がカラダを包み込む。同時に、尻穴を擽りながら潜ってくる蛇の感覚にも悍ましさを覚える。しかし、なにより蛇に陰唇を這い潜られ、股間を、尻穴を、尿道を、膣内を犯されてゆくという生理的嫌悪感に勝ち始めている甘美な快楽に恐怖しながら肢体を支配されてゆく。

「へ、蛇が、入ってくる、あたしのナカに、入ってくる、いやだやめてやめて痛い痛い痛い気持ち悪い気持ち悪い痛い気持ちいいっ……！」

次々と蛇の頭が陰唇を潜り、幾匹もの蛇が頭を滑らせてナカへ入ってくる。爆発的に、止めどなく溢れる快楽が少女のナカに潜り込み、膣口から順に肉襞を犯してゆく。黒く這う蛇が無数に分裂して膣道に入ってくる、少女のナカを鱗が掻き、影の蛇がうねり、子宮が熱く、堪らない程に滾って少女の肉体をどうしようもなく狂わせてゆく。

「誰か、助けてぇっ！もう、許してぇっ！あっ、あぁっ！いやぁっ！やめてぇっ！そんなに、入れないでぇっ！あぁっ！だ、だめぇっ！いや、いや、いやぁぁぁぁっ！」

蛇の舌が。細かい鱗が、薄くて太い胴体がキャロンの全身に巻き付いて躰の中に。乳房を締め付ける。同時に膣道を這い進む蛇達が胎の奥底にまで潜り込んで卵巣にまで絡みつき、子宮に牙を立てる。未知の快感に絶叫しながら絶頂する少女。

「だ、だめぇっ！あ、あぁっ！な、中、来てる、あぁっ、舐めないでぇっ！あ、そこ、はうっ！よ、弱いとこ、擦っちゃダメぇっ、う、あぁぁぁぁ！はぁ、はぁ、あくぅっ！びりびり来ちゃうっ！イク、イクぅぅっ！あぐ、うぁっ、あぁぁんっ！」

「いい格好よ、キャロン。絵画か彫刻にして残しておきたい程に淫らで、美しいわ。タイトルは……そうね、『蜜奴隷キャロンの堕天』かしら。いいわね、あたしの玉座に永久に飾っておいてあげる！あはははははは！」

股間を無数の黒い蛇に集られて犯されるキャロンを嘲り笑うサラ。昂奮してきたのか、喘ぎ悶える少女を見ながら玉座に座ったまま薄衣をはだけ、自らの乳房を弄り、裾を捲って股間に手を伸ばし、弄り始める。

『あっ！あくぅっ！ぐっ、うぅっ！んっ、んぅんっ、んはぁっ！あっ、あぁっ！ぎ、いっ、あ、あひぃん！イイのっ、気持ちイイのっ！あっ、あたしっ、犯されてるのにっ！きもちよすぎてっ、おかしくなっちゃうのぉっ！あぁっ、はぁぁんっ！』

サラの嘲る声を遠くに聞きつつ、少女は鏡を見続けてしまう。ある夜の淫夢で見た人馬のような姿の悪魔の背にまたがって、極太触手のたてがみに貫かれる、乗馬凌辱で悦んでいる自分が映っている。胎内を蛇に蹂躙されて脳裏に炸裂する稲妻に喘ぎながらその映像を見ていると、自身が犯されて悦んでしまう淫乱女なのだと思い知らされてしまう。

「あぁっ！あぁっ！まだはいってくる、もうやめて、あぁぁっ！あ、あたしの中、蛇で、いっぱい掻き回されてるぅっ！あぁんんっ！ひゃぅ、お、お尻の中で、動かないでぇっ、響いちゃう、うぅぅんっ！ああダメ、あそこの中で、絡まって、暴れてるぅっ、あたし、もう、ダメ、ヘンになっちゃうぅっ！」

『あぁっ！もうイきそうっ、だめ、こんなすごいの、あたし、耐えられないっ……あぁっ！でも、体中が、びくびくして、悦んじゃうのぉっ！あぁぁっ！きて、きてぇっ！あたしっ、飛んじゃうっ！あぁぁっ！！もうダメ！イっちゃうっ！イっちゃうよぉっ！』

少女の胎が膨らむ程に蛇は蹂躙し、逆流し、穢し尽くし、染め抜き、犯し尽くす。尿道も尻穴も、花芯も膣道も卵管も卵巣も、子宮の中までも侵入し、蠢き、のたうち回っている。敏感な所に鱗や舌、牙が当たるたび、少女の肢体が強すぎる性感に跳ね、尻を振り、乳房が踊る。呻きが、喘ぎが、悲鳴が、懇願が、嬌声が、喉が枯れるほどに迸り続ける。

「ひゃぁんっ！も、もう、ゆるしてぇっ！あぁっ、だめぇっ！中でそんなに動かないで、やぁっ、こわれちゃうっ！あっ、また、またきちゃうっ、あっ、ダメ、イっちゃう、真っ白になっちゃう、あぁぁぁっ！もう、何も考えられないっ、もうイクの、イクっ！はぐぅっ、あぁっ！あはぁんっ、あっ、あああぁぁーっ！」

キャロンが何度絶頂に達しようが、蛇は蠢くことを、貪ることを止めはしない。這い回り、肌を犯し、蜜を吸い、淫毒の牙を立て、快楽を貪り続ける。少女の膣道の襞のひとつひとつ、直腸壁にも、子宮壁にも絡みつく。Gスポットを執拗に撫で回し、子宮口を丹念に舐る。陰唇の肉襞を掻い潜って花芯を舌で搾り上げる。尻穴を幾度も出入りしながら奥深くへ潜ってゆく。少女は最早、悲鳴と嬌声をあげる事しか許されてはいなかった。

『いやぁんっ！何か、ヘンっ……あぁっ！や、ぁっ！はぁ、いやっ！飛んじゃう、ふあぁっ！いやっ、や、やだぁっ！何これっ、こんなの、知らない、お願い、ゆるしっ、あぁっ！あ、ダメ、またイっちゃう、くうぅっ！あっ、いゃぁぁぁーっ！』

「あぁっ、これ……あの時の……いや、も、もうやめて、ゆるして、あぁっ、はぁっ、はぁっ、これ以上、イかされたら、あたし、もうっ、戻れなくなっちゃう！……あ、く、ぅぁはっ、あぁ、またイク、イっちゃうぅっ！あぁぁあぁぁぁーっ！」

自分がラモー・ルーの城でスライムプールの罠に落ち、全身を隅々まで犯されて初めて絶頂の味を知ってしまった時の映像を見せられながら、キャロンは幾度目かの絶頂に達してしまう。股間から溢れた蜜は既に布が透けてしまうほどに股間をぐっしょりと濡らし、溢れた蜜が太腿を伝って床に落ち、汗と混ざって小さな水たまりを作っていた。

『あぁんっ！やぁっ、んっ、きゃぅ、あぁんっ！あ、あぁっ！ふ、深いよぉっ、あ、ぐっ、奥まで、きてっ、や、あぁぁんっ！中で、あ、暴れてっ、あぁっ！だめ、そんなに突いちゃ、やだぁっ！あ、くぅんっ！お、おかしく、なっちゃうぅっ！』

「あぁっ！お、お願いっ、もぅ、イきたくない、あぁ、だめっ……こんなに、きもちいいの、おかしい、だめぇっ、あぁんっ！いやぁっ、これ以上されたら、あ、あたし、こわれちゃう、んっく、うぁっ！あぁっ、いやぁっ、またイっちゃう、イっちゃうよぉっ！あぁっ！イクうぅっ！」

目の前の鏡にはキャロンの肌に残った蛇が蠢いている姿が映っている。喉やうなじから耳までを丹念に撫でる蛇が、乳房を絞る蛇が、脇を擦る蛇が、臍を穿る蛇が、太腿に巻き付く蛇が、脹脛を擦る蛇が、尻穴から会陰を往復し続ける蛇が、陰唇を激しく出入りする蛇が、膣襞を擦りつける蛇がいた。その全てが、少女を嬲り、犯し、貪っていた。

「はぁ、はぁ、はぁ、お、おねがい、もう、ゆるして……もう、イきたく、ない……これ以上されたら、あたし、戻れなくなっちゃう、はぁ、はぁ……」

幾度もの絶頂に力尽き、涙を浮かべて懇願するキャロン。赤い薄布を巻きつけただけという煽情的な生贄の衣装はキャロンが強く悶えるたびに緩み、解け、はだけ、汗と蜜に透け、服の意味を喪失し、今や布が僅かに纏わりついているだけの有様となっていた。

『あぁぁっ！やぁっ！はぁんんっ！っあ、き、きてぇっ！あたしの中にっ、いっぱい注いでっ、めちゃくちゃにしてぇっ！あぁっ！あぁぁっ！やぁっ、だめ、もうダメ、もうあたし、あぁっ、イっちゃう、うぁっ、あっ、うぅぅっ！あああああっ！』

しかし、鏡はキャロンの痴態を次々と映し出し、蛇は無情に少女を犯し続ける。陰唇を、花芯を、膣内を、膣奥を、急所を、性感帯を這いまわり続け、徐々に身体全体を膣内へと潜らせ始めていた。映像はいつの間にか、キャロンが魔物に犯されて絶頂に堕ちる画像が加わっていた。少女の記憶には無い映像もあったが、それは鏡の魔物が平行線上の世界から集めたものであった。

「んっ、はぁっ……ダメよ、まだ許してあげない……貴女は蛇に犯されてイキ続けるの」

自分の衣装をはだけて裸になり、乳房を弄り、陰唇を指で愛撫して吐息を漏らしながらも、冷たく言い放つサラ。今のサラの姿はキャロンと瓜二つになっているため、キャロンの眼には映像が一つ増えた形になっていた。

「あっ、ぎぃっ！あぁぁっ！へ、蛇が、ナカに、はっ、ぐ、はぁ、あぐぅ！んぁっ！ひっ、ひっ、ふぅ、んっ、ひぃ！ぐ、あぁんっ！うそ、まだ入ってくる、あぐっ、う、ぐぅっ！うっ、うぅっ、あ、いや、まって、もう、そんな、あぐっ、いや、うぅっ！」

『あぁっ、や、やめて、ゆるして、おねがい、あっ、あ、ぁ、ぁ、あ、あぁっ！いやいや、中に、出さないで、いやぁっ！はぁ、はぁ、はぁぁっ、だめ、あぁぁっ、熱いの、来ちゃう、はぁ、はぁ、あぁ、だめっ、イっちゃう！あぁぁ、イっちゃうよ、あぁっ！』

極太に成長した蛇を挿入され、自分の痴態に犯されながら蛇にも犯される少女。二重の凌辱に肉体と心は休息を許されない。吐息は荒く、短くなり、振り乱される髪に連れて乳房は奇妙なダンスを踊り続ける。しかし少女の肉体はこれだけ犯されているのにも関わらず、自然と腰を動かし始め、なおも性欲への飢えを露わにしてしまう。

「ひぅっ、も、もう、やめて、お、おねがい……あぐっ、これ以上、はいんない……いや、あぁぁ、ふぅっ、ふ、はぁーっ、はぁっ、あぁぁ、あぐぅっ、へ、蛇が、こんなに、く、くるし……おなか、いっぱいで、ぁ、だ、だめ、中で、暴れないでぇっ！」

蛇が膣奥に殺到すると、行き場をなくした蛇の胴体がキャロンの子宮を押し広げ始める。さらに淫毒に犯された乳首からは母乳が零れだし、少女の肌を白く濡らす。その姿はまるで、臨月の妊婦であるかのように見えた。しかし、その胎の中身は胎児ではない。巨大な刺青の蛇である。少女にとっては子宮を内側から圧迫されながら、地獄の快楽に際限なく突き落とされ続けているようなものだった。

「ふふふ、キャロン。蛇に孕まされるなんて、滅多に経験できないわよ……ここからは貴女の大好きなラモー・ルーの映像をたくさん見せてあげるわ。もっと感じて、もっと良くしてもらいなさい。夜の国の魔力で子宮がいっぱいに満たされるまでね……」

サラの嘲笑もキャロンには聞くだけの余裕はなかった。膣奥の隅々、子宮に至るまで犯され、強烈な快楽に思考が飛ばされて、千々に乱れてしまう。人間では決して味わえない魔悦に晒され、少女はただ喘ぎ、悶えるほかはないのだ。そして、幾度も絶頂に追い込まれて、虚ろになりかけている彼女の瞳に赤い光が映り込む。

『だめ……あの赤く光る目……ダメ、なのに……ラモー・ルーの、目……あぁ、熱い……あたしの身体、燃えちゃいそう……あぁっ、落ちる、もう、あたし、堕ちちゃう……』

「あぁぁぁっ！あ、熱いっ、あついのっ！あぁっ！あっ、お、おなかが、あぁぁぁっ！くるし、うっ、ぐ、うぅぅっ！いやぁっ、あっ、あ、頭の中、真っ白になっちゃう、あぁ、ダメ、だめ、こわれちゃう、駄目ぇっ！もうあたし、あたしぃっ！あぁぁぁっ！」

悲鳴を上げながら再び絶頂に果てるキャロン。彼女にとって不幸なことに蛇が胎内で膨張しながら蠢き続けるため、意識を失ってもすぐに覚醒させられてしまうのだ。そしてまた快楽の坩堝へと突き落とされてしまう。これが幾度も続くのだ。そして目に入る映像の相乗効果で、自分がラモー・ルーに犯されていると誤認し始めてしまう。それは少女にとって、最も幸福な快楽地獄への一本道だった。

『あぁぁっ！すごいっ、すごく感じちゃうのっ！あぁぁっ！たまらない……も、もっと奥っ、突いてぇっ！蜜吸って、イかせて、イかせて欲しいのぉっ！あぁぁぁっっ！もうダメ、あぐぅんっ！あたし、おかしくなっちゃうっ！あぁ、またイっちゃうぅっ！』

「いや、いやいや、いやぁっ！も、もうゆるして、あぁっ、あ、ぐ、うぅぅっ！はぁ、ぁぐ、うんんっ！ダメ、はぁ、は、はんんっ、あ、またイク、うぁ、はぁっ、はっ、はぁっ、あぁイク、イっちゃうぅっ！くぅっ、あ、あぁぁぁぁぁーっ！」

触手で宙吊りにされ、全身を蛇に巻き付かれ、胎を膨らませた少女が淫靡に踊っている。歌は喉から振り絞るように放たれる蕩け切った嬌声。釣鐘のような乳房は蛇の腹で締められて歪み、蛇に絞られて固く尖った桜色の乳首からは母乳が時折零れ出ては肌を濡らしている。これはかつて少女がスライムに捕まって犯された時、乳腺に侵入された後遺症だった。ピンと張りつめた爪先の下には汗と愛蜜が滴って小さな水たまりを作っている。これは快楽の拷問だった。身も心も、魔力さえも堕落するまで少女は責められるのだ。

「嘘、おっぱい、出て、あぁっ、いや、お、おっぱい出てるのに、気持ちよくなっちゃう……いやぁっ、も、もうゆるして、たすけてぇっ！あぁっ！あっ、あ、イクたびに、頭の中、真っ白になっちゃう、あぁ、ダメ、駄目になっちゃう！もうあたし、あたしぃっ！こわれちゃうっ！こわれちゃうよぉっ！あ、あぁぁぁっ！」

泣き叫び、喘ぎ続けるキャロンの視界の隅にある鏡に、拡大された彼女の胎内が映っていた。その中で、子宮にいる蛇の一匹が口を大きく開け、子宮内を行き場なく漂っている男の精液を飲み込む。また、卵巣に取り付いて強制排卵を促していた別の蛇の頭が、生まれ出たばかりの卵子を捕え、呑み込むと卵管を通って子宮へと戻ってゆく。

『キャロン。お前は私以外では満足できない体なのだ。そうら、この熱い触手でもっと感じるがいい。至高の快楽を、究極の絶頂を味わい尽くすのだ！』

鏡の中のラモー・ルーの声が耳元で聞こえ、脳へ辿り着いた瞬間、少女の肢体は震え、軽く達してしまう。頬が僅かに緩み、躰のこわばりが取れる。ラモー・ルーの触手が脳裏によぎり、肉体が快楽を受け入れ始めたのだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、あ、はぁ……ラ、ラモー、ルーの声……んっ、あぁぁ、あ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、あぁぁぁぁっ……はぁっ……き……きもち……いい、っ……」

子宮を青黒く埋め尽くし、更に膨らませてゆく蛇の胴。そこに卵巣へ侵入した蛇が戻ってくる。口を開き、卵子を子宮内に放つと、幾つかの蛇が僅かに蠢動して口から青黒い靄のようなものを卵子に向けて放った。それは蛇の魔力の塊であり、他の動物で言えば精子と同等のものだった。青黒い靄に包まれた卵子は青黒い紫色に染まってゆく。そうして青黒い卵子となったものを先刻精子を呑んだ蛇が呑み込む。胎内を映す鏡を見る余裕のない彼女は気づくことがなかったが、これは蛇が受精卵を作る作業であった。これがサラの言った蛇の仕掛けであり、蛇は彼女を本当の意味で孕まそうとしていたのだ。

『し、子宮に、たっ、卵が入って、あぁっ！まって、もう入らない、あぐぅぅっ！お願い、止めて、あぁっ！入って、きちゃうぅっ！産卵されて、イっちゃうよぉっ！』

「あっ、ぎぃっ！あ、あぁぁっ！お、おなか、もう膨らませないでぇっ、ぐ、はぁ、はぁ、あぐぅ！ら、ひっ、ひっ、ふぅ、んっ、ひ、いぃぃぃ！ぐ、あぁぁぁんっ！」

鏡に写っているキャロンは膨大な蛙の卵を孕まされて膨らみ切った胎を抱えて苦しみ喘いでいた。広がった陰唇からは孵った幼生の尻尾が覗いてビチビチと跳ねている。そんな悍ましい映像を見ながら、現実で蛇に胎を埋め尽くされたキャロンは肌と胎内を這う蛇の捕食と凌辱に喘ぎ悶えている。

「ふふふっ、絶頂と精液にまみれた閉鎖空間で、快楽と共に身体も心も変わってゆく悦び……そのカラダがよく覚えているでしょう？まだまだ愉しませてあげるわ……」

キャロンの姿のままで妖艶に吐息を漏らし、いやらしく乳房を揉み、花芯に蜜を擦り続け、昂奮にうっとりとした表情を浮かべつつ、サラが嗜虐的に笑う。

「や、ダメ、やめて、そんな、あぁんんっ！へ、蛇が中で暴れて……あぁっ、こんなの嫌、あうぅぅっ！身体、また……くぅうんっ！はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、ひゃぁんっ！」

キャロンの視界の隅にある鏡には蛇に埋め尽くされて青黒く変色した子宮の内部が映っていた。その中央に、青黒く染まったキャロンの受精卵が浮いている。それはゆっくりと子宮壁に定着しようと動いていた。その行く先には、赤黒く光る烙印が浮かんでいた。

「あぁぁぁっ！あ、熱い、あついのぉっ！お、おなかっ、くるしっ、あぁぁぁぁーっ！ダメぇっ！こんなの、耐えられないっ！カラダが、おかしくなる、おなか、裂けちゃうぅぅっ！もう、ゆるしてぇっ、こ、これ以上、蛇、入って来ないでぇっ！」

『どうだ……身体が蕩けるようだろう？……久しぶりの旨い蜜に俺様の触手も悦んでおるぞ……さあ、もっと淫らになれ、蜜を流してよがり鳴くが良い。フフフ……』

時折耳元で聞こえるラモー・ルーの声がキャロンの心を急激に淫蕩に傾け、胎の奥に熱いものを感じさせてゆく。あの戦いの後、少女がラモー・ルーの声や眼光、触手を思い出して自慰に耽らなかった日はないほどなのだ。実際に聞かされれば効果は覿面だ。少女はいつ果てるともなく続く甘く昏い快楽の拷問に叫び続けるほかはなかった。

「いやぁっ！こんなの、ダメなのにっ、あぁっ！いや、いやぁっ！あ、くぅんっ、あひいっ、あぁぁぁ、だめ、すごく感じちゃう……はぁ、はぁ、あぁぁっっ！」

『キャロンよ、お前はもう身も心も私のものだ。永遠に私の蜜奴隷となるのだ……』

ラモー・ルーの声が耳元を擽る。キャロンの脳裏にあの時の光景が蘇り、鏡の映像と一致する。犯されて絶頂に果て、倒れ伏した自分にかけられた言葉だ。その時、夜の国の魔力に堕ちた自分はその言葉を確かに嬉しいと思った。その歓喜は肉体が覚えている。その歓喜が再生されると、キャロンの頬は蕩け、唇が緩んで熱い溜息が漏れる。

「はぁっ……だめ、あの赤く光る目……だめなのに、あぁ……ラモー・ルー、あぁっ、熱い……あたしの身体、燃えちゃいそう……あぁ、身体が疼いちゃう。このカラダを鎮めて欲しい。ダメ、物足りない。指じゃ満足できない。激しく抱いて、貫いて、欲しい……」

『この目を見るのだ、キャロン。どうだ、この光る眼はよく効くであろう？魔術でお前の心を蕩かしてやるぞ……どうだ、ラモー・ルーの触手が恋しくはないか？……ほぅら、素直になるがいい、キャロン……身も心も蕩けるような甘い快楽が欲しいのだろう？』

眼前の鏡に映る男の眼が光り、赤い光が鏡に満ちる。キャロンの視界も赤い光で満たされ、ラモー・ルーの声と赤く光る目。少女の心と肉体、両方にこれ以上なく深く刻まれたものを呼び起こされる。そして抵抗を失った少女の瞳が光を失って蕩ける。

「あうっ、ほ……欲しい……うんっ、あの、熱い舌……あぁっ……お願いっ……」

あの時と同じように少女はうわ言を呟き、心と肉体の均衡は崩れて快楽へと雪崩を起こし始める。少女は蛇に胎まされながら、鏡の中のラモー・ルーの触手に犯され、愛撫されていると誤認してしまったのだ。

「効くとは思っていたけど本当によく効くわね、声を聴いただけで心が溶け堕ちるなんて……相性が良すぎるんじゃないかしら……」

自慰に耽っていたサラが思わず素に帰り、独り言を言ってしまうほど、ラモー・ルーの眼と声はキャロンに対して覿面の効果を示した。苦痛に歪んでいた眉根が緩み、口元が綻び、握りしめていた手が力を失う。魔力の籠っていない単なる映像でさえこれなのだ。本物だったらどれほどの事になっていただろう。

『あぁっ！いやぁっ、だめぇっ、もうやめてぇっ、あああっ！はぁっ、も、もうだめ、もうあたしっ、あぁっ！あぁぁっ！たすけて……あたし、もう、イっちゃう、あぁっ、ラモー・ルーの触手でイかされちゃうっ、はぁっ、はっ、あっあぁぁぁぁっ！』

少女の胎の中で青黒い受精卵が子宮壁に定着した瞬間、彼女の下腹が赤く光る。同時に、天井から新たに触手が伸びてキャロンの膝に絡みつき、両肢を大きく開きながら持ち上げる。それによって辛うじて身体に纏わりついていた赤い布も全て落ちて少女は全裸になり、身に着けているのは彼女の枷となる魔道具の紅いチョーカーとガーターリングのみとなっていた。

少女は臨月のように胎が膨らんだ状態で蛙のように脚を開き、アソコを全て晒す恥ずかしい格好になる。胎に収まり切らなかった蛇が陰唇から出入りし、膣に入らなかった蛇が膨らんだ乳房に絡んで乳首に吸い付いている。キャロンは未だ知らない事だが、これは歪んではいるが人間の出産の体勢に他ならなかった。

『ああぁっ！そんな、おっぱい、吸っちゃ……んんっ！ん、ああぁっ！は、はぁ、はぁ、も、もう、ダメ、欲しいの……お、おねがい、ラモー・ルー……きて……ああぁっ！あっ、あぅ、うんっ、ん、ああっ！い、いいっ、いいっ、すごく、いいのぉっ！』

「ひゃっ、ひ、ひぃっ、ひぅっ、はっ、おっぱい、だめぇ、きもちいいの、と、とまんない、つ、突いちゃダメぇっ、ひっ、ひ、おなかのナカ、熱い……やっ、まって、あたしまた、あっ、んはぁっ、あう、あぁっ、あたし、またイっちゃう！」

現実では蛇に全身を蹂躙されつつ、ラモー・ルーの触手に全身を愛撫される映像に心を奪われ、蕩けた声を漏らしてしまうキャロン。先程までの恐怖感が薄れ、肉体は積極的に快楽を貪ろうと身じろぎしている。実際には子宮を蛇に埋め尽くされて臨月同然となっているのだが、心が現実から逃避してしまっているのだ。

『どうした、キャロン。さっきより蜜が濃くなったぞ？ほうら、よく見てみるがいい、あそこが物欲しそうにひくひくと……何とも淫らな体に育ったではないか。嬉しいぞ、私の為にここまで濃密な蜜を捧げてくれるとはな』

「はぁ、はぁ、あぁっ、そ、そんなこと、ひゃ、んっ、や、あっ、言わないで、や、そこ、そこっ、や、あぁっ、ダメ、キモチ、いいっ、あ、あっ、蜜、吸われるの、気持ち良すぎるっ、お、おかしくなっちゃう、はぁっ、だめ、そんなに良くされたら、んっ、あぁっ、イっちゃうよ、あぁ、またイク、あぁぁっ、イクぅっ！」

甘く蕩けた声を上げながらあごを跳ね上げ、既に幾度目か数えることを諦めるほどの絶頂に果てるキャロン。髪を振り乱し、乳房を突き出し、腰はひくひくとひとりでに動いてしまう。股間からは先程よりも愛蜜が溢れ、潮が噴き出しては零れ落ちている。

『鏡を見ろ、キャロン。すっかり発情した牝の顔になっているぞ？蜜を流し、すべてを曝け出せ。至高の快楽を貪るがいい。さあ、堕ちろ。堕ちるのだキャロン。淫らな自分を認めるがいい。その時こそ、お前はこのラモー・ルーの永遠の蜜奴隷となるのだ！』

「あ、あたしは、ラモー・ルー様の忠実な蜜奴隷です……あたしの蜜を啜って、貴方の魔力の糧としてください……淫乱なあたしに、至上の快楽を与えてください……」

熱に浮かされた表情を浮かべ、少女はうわ言を漏らすように魔王への服従を誓う。肉体が淫蕩に染まりきってしまい、まともに思考することも出来ないのだ。しかし、昏く甘い夢は現実の光景によって強制的に引き戻されてしまう。

『卵が、卵が入って、子宮、広がっちゃう、あうぁっ！ダメ、イっちゃう、卵産みつけられてイっちゃうよぉっ！ダメぇっ、子宮、開いて、奥まで響いちゃう、種付けされてるのに、イっちゃうよ、あああああっ！イクっ！』

「あぐっ、お、おなか、重いっ、はぁ、はぁ、く、くるし、あああああっ！」

『そうだ、キャロン。これがお前の本当の姿。お前の本当の望みなのだ……さあ、ラモー・ルー様の魔力を受け入れるがいい、そして至上の快楽を味わい尽くすのだ』

「あぐっ、う、ぐぅっ、ほ、本当の……んくぅっ、の、望み……あぐっ、はぁ、はぁ」

少女の脳裏に一瞬、ラルの人々の顔が浮かぶ。しかし、その人たちの顔を、彼女はもう、思い出すことが出来なかった。代わりに彼女の体を弄んできた牡たちの顔が浮かんでは過ぎる。そして、より明確に、ラモー・ルーの姿が脳裏に浮かぶ。あの熱い舌が、触手の臭いが、逞しく凶暴なモノが、身体に深く刻み付けられた、初めてを奪われた時の記憶が。

『人間は肉の交わりから生まれる。お前はヒトの肉欲から生まれたのだ。キャロン、何も恐れることは無い。自分の中にある欲望を受け入れ、貪ればよい。お前が今、溺れているものは、お前自身から生まれた性欲だ。拒む必要はない……』

「そ、そんな、ことっ……あぐぅっ、ふう、ふ、ふっ、くぅぅっ、あぁっ！」

広がりきった子宮が苦痛を訴え、意識が戻りかけるが、いつの間にかそれが快楽にすり替わってまた絶頂してしまう。自分の肉体の浅ましさに絶望する少女。

『どうだ、キャロン。私の触手はお前の子宮の奥底まで届いているぞ。私の魔力の波動に曝された子宮が歓んでいるのがお前にも分かるだろう?さあ、蜜をもっと流せ。リバースの力が溶け出した芳醇な蜜を溢れさせ、私にすべてを捧げるのだ』

「あぁっ、し、子宮の奥が、熱いっ……もうだめ、あぁ、感じちゃうの、子宮が感じちゃう!ラモー・ルー様の触手が、子宮の奥を擦ってるっ、はっ、ぐ、んぅっ!すごく気持ちいいの!子宮に響いてるぅっ、あぁっ、すごい、たまらないよぉっ!」

現実では子宮を蛇に犯され、既に臨月を迎えてしまっているのだが、少女はラモー・ルーの触手が子宮で暴れ回っていると認識してしまっていた。快楽に晒され続けて目が眩み、脳内にまで桃色の霞がかかっていたのだ。

「すごいっ、な、中で、うねって、あぁっ、吸われてる、はぁ、はぁ、あぁっ、気持ちイイ、あたしっ、み、蜜吸われて、気持ちよくなってるぅっ!あぅっ、イク、はぁっ、はぁっ、あぁっ、イっちゃう!あんっ!あたし、蜜、吸われてイっちゃうよぉっ!」

『あぁ、あっ、あぅっ、ま、まって……あんっ、そこ、あぁっ、なんで?う、んんっ、なんでこんな、きもちいいのっ……あ、うっ、すごい、あぁっ、う、うそ、お、犯されてる、のに、こんな、あっ、あはぁっ、弱いとこに、きて、感じちゃう、はぁっ、あぁっ、ダメ、きちゃうっ、う、あぁっ!だめっ、こわい、こんなの、いやぁっ、あ、ダメ、飛んじゃう、あ、あ、イク、あ、あぁっ、いやぁっ、あ、うあああああぁーっ!』

鏡にはラモー・ルーの触手に犯され、牝の悦びを植えつけられようとしている自分が映っている。その時の事を少女は今も覚えていた。悍しくて、気持ち悪くて仕方がなかった触手の感触が反転し、心地よくて愛おしいものに思えてしまう恐怖を。自分の身体が、堪えようとする意志と心を裏切って触手に屈服してしまう絶望を。今まで生きて来た時間を快楽で全て洗い流そうとする怒涛のような幸福を。そして例えようのない絶頂の悦楽を。

「あぁぁぁぁっ!し、子宮口、内側から擦られてるぅっ、こ、こんな、すごすぎてっ、あぁダメ、戻れなくなっちゃうっ、あぐぅっ!触手が、あふれちゃう、んぅううっ!あぁ、またイク、あっ、んくぅっ、イクっ!あぁぁぁぁっ!」

触手によって両手足を吊り上げられ、両脚をこれ以上ないほどに開いて陰唇を丸出しにする、出産を迎える妊婦のような姿で喘ぎ悶えるキャロン。蛇が詰まった胎ははちきれんばかりに膨らみ、蛇が最初に少女の肌へ降り立った痕はいつしか血が滲んで滴り、模様のような痣を描き始めていた。

『美しいぞ。わが至宝たる蜜奴隷キャロン。肉欲に溺れ、よがり喘ぐお前の姿は本当に美しい。この身体も心も、全てがおれさまのものだ。お前は犯されて歓ぶ淫乱な牝だ。この身体はもっと犯されたい、永遠に支配されたいと望んでいるぞ。なあ、キャロン？』

「はぁああっ、す、吸われてる、蜜吸われてるぅっ！き、気持ちいい、イイのっ、もっと、もっと啜ってぇっ！んはああっ！好きなのっ！好きっ！ラモー・ルーさまっ、あぁぁっ！あ、愛してますっ！だから、あたしを、触手でイかせてくださいっ！」

鏡の中のラモー・ルーに向かって無我夢中に愛を叫んでしまうキャロン。現実に蜜と魔力を吸い上げているのは子宮を埋め尽くし、胎内で蠢いている蛇であるが、そのことにまったく意識が向いていない。だから、鏡の中で触手に犯されている幸せそうな自分に、自らを重ねて嬌声をあげてしまうのだ。

『もっと蜜を啜って、愛してぇ……あぁっ、凄いっ！ラモー・ルーさま、愛してます……あぁ、イク、あぁっ、イクぅっ！あっ！あぁぁぁんっ！あ、はあああんっ！もうイっちゃう！、イっちゃうよぉ！、あ、あたしっ、イクっ、イク、うぅぅっ、ああああっ！』

「あぁぁぁぁっ！あたま、真っ白になっちゃう、あぁっ、もうダメ、あたし、イク、イっちゃう！お、おねがい、ラモー・ルー様の精液を、あたしのいやらしい子宮にぶちまけてくださいっ！あぁイク、はぁぁっ、イクうっ、んんぅううっ！」

鏡の中の少女がラモー・ルーに触手で犯されて絶頂を貪り果てる姿を見ながら、キャロンも同じように、しかし蛇に子宮を蹂躙されて絶頂を迎えてしまう。臨月の裸身を激しく震わせながらあごを跳ね上げ、激しく潮を吹いてしまう。

「はぁっ、はぁっ、あ、んんっく、あぁ、はぁ、はぁ、はぁ……あぅ、ふぅ、ふぅ……」

愛しのラモー・ルーに犯されたと錯覚したまま、満たされたように荒い息を吐く少女。しかし、現実は非情である。それを教えるかのように、たわわな双乳に登頂した二匹の小さな蛇が、頂上で桜色に尖った乳首へ、その黒い牙を突き立てたのだ。

「あっ！痛いっ、く、ふぁぁんっ、あ、ひぃいっ！ち、乳首噛んじゃいやぁっ、あ、ひあぁっ！え？うそ、何かが入ってくる？あぐ、うあああっ！」

乳首を噛まれた痛みに一瞬で夢心地から覚醒させられるキャロン。そして次の瞬間、何かが乳首の内側へ侵入した感覚に身体が跳ねる。明らかに液体とは違う、冷たく、ざらっとした何かが少女の乳首に潜り込み、更に乳房の中へ進もうとして来るのだ。

「い、いや、そこ、そんなとこ、違う、うそ、でしょ？やめ、て、あぐっ、ひ、ひぅ、そんなとこ、入らないっ、あぐっ、いやぁっ、だめ、だめぇっ、おっぱい、入って来ないでっ！それ以上は無理、無理なの、いやぁっ！やめて、お願い、許してぇっ！」

信じられないという表情を隠そうともせずに、自分の乳房を見る少女。快楽によって解され、僅かに膨らんだ形の良い乳房の、その先端でツンと上を向いて尖った小さな桜色の乳首、そこは今、小さな蛇によって呑み込まれ、青黒く染まっていた。そして、そこから舌が伸びている。とても信じられない事ではあるが、淫毒を纏った舌が無数に分かれ、乳首から乳腺へと入り込んだのだ。

「いやぁっ、ち、乳首入るの、やめてぇっ！そんなの、いやぁっ、あ、あっ、舐めないで、あぁっ、あああっ！む、胸が、あぁっ！ど、どくんって来た、う、うぅっ、び、媚薬が、おっぱいに、んはぁぁっ！あああっ！熱い、おっぱい、熱いよぉっ！」

厚みがないために何の抵抗もなく、両乳首の目に見えない穴から入り込んだ蛇の舌は、乳腺を潜りながら徐々に乳房の奥へと侵攻する。そして乳腺を隅々まで潜りながら淫毒を注入し、乳首を、乳房を、少女の肉体を狂わせ、淫らな牝へと貶めて行く。

『いやぁっ、乳首の中、潜らないでぇっ、いや、いやぁっ！あ、くぅんっ、あぁ、だめ、あたし、感じちゃう！はぁ、あぁぁっっ！ひぅっ！あぁ、だめ、乳首、ダメ、きゃぁっ！あっ、そ、そんなにされたら、あたし、あ、あたし、あぁ、おちちゃう、うぅっ！』

強すぎる性感に絶叫しながら喘ぎ、絶頂しながら叫ぶ少女。かつて、スライムに乳首の中に入り込まれて犯された画像が鏡に映っているが、今回はそれを越えていた。厚さがないからといって、乳首の奥、乳房の中にまで入って来るなど、予想のはるか上だったのだ。

「厚さがないってことはこういうコトも出来るのよ、キャロン。めったに体験できない愛撫だからよく味わいなさい……もっとも、聞いている余裕はなさそうだけど」

「いやぁっ、も、もうやめて、ゆるしてぇっ！おっぱいの中で動かないでぇっ、こ、これ以上されたら、おっぱい、こわれちゃう！おねがい、抜いて、抜いてぇっ！あぁぁっ！もうダメ、だめぇっ、おっぱい、犯しちゃ嫌あぁっ！お、おかしくなっちゃうっ！」

蛇に乳房そのものを犯され、サラの声が耳に入らなくなるほどに絶叫するキャロン。乳房の内側へ入り込まれているという全く未知の感覚。だというのに痛みは全くなく、この常軌を逸した凌辱を気持ちいいと感じてしまっている、自分の身体の裏切りが恐ろしかった。乳腺を蛇の舌で開発され、乳房の内側を淫毒で満たされ、少女の肉体は幾度も絶頂し、股間からは蜜が溢れ、幾度も潮が吹き出ているのだ。

『あぁあっ、あぅっ、まって、中で動いて、あんっ、そ、そこは、あぁっ、なんで？う、んんっ、なんで、こんなに気持ちいいの？あ、うっ、すごい、あぁっ、こんな、あっ、あっ！はぁ、あはぁっ！弱いとこ、来てる、あぁっ、ダメ、イクっ、う、あっ！』

「あっ、あああああっ！な、なにこれ、すごい、うぐっ、んはぁぁっ！あ、熱い、は、はぁっ、あ、あぐ、うぅぅっ！お、おっぱい、すごく、いいっ、うそ、こ、これダメ、こんなの、お、おかし、あぁっ、いや、おっぱい、弄っちゃ、いやぁぁぁっ！」

厚さのない蛇の舌が乳腺を隅々まで犯し尽くすと、乳房に張り付いた蛇が蠕動を始め、揉み扱き始めた。想像を絶する感覚に嬌声をあげ始めてしまうキャロン。淫毒に染め抜かれて性感帯の塊と化した乳房を弄られ、同時に舌が抜かれたせいで腫れあがった桜色の乳首を弾かれ、強すぎる性感に晒された少女の声は、たちまち甘く蕩けてしまう。

「あんっ、ん、んぅっ、そ、それ以上おっぱい、扱いちゃ、あ、あぁんっ、ダメ、あうぅうっ、ち、乳首、痺れて、うぅんっ、気持ち、いいっ、だ、だめっ、も、もうイク、だめぇっ、あ、あああああっ！乳首、だめぇっ、イク、乳首イっちゃう、んあああああっ！」

人智を越えた快楽と、肉体を直接開発される恐怖に泣き叫び、絶叫しながら何度も絶頂するキャロン。やがて、蛇に苛め抜かれて熱く火照った乳房の奥から、止めどなく湧き上がってくるものを感じ、それが何か理解してしまい少女は怯えてしまう。と同時に、まるで射精する男のモノみたいだと自分の乳房を見ながら冷静に感じてしまう。

「あぁっ、だめ、そんなのいや、おっぱいイっちゃう、イっちゃうよぉっ、あぁっ、おっぱいが張って、だめ、出る、出ちゃう、うそ、そんなの、いや、いやぁっ！止まらない、あっ、止まらない、あああああっ！出ちゃう、あぁっ、イっちゃうぅぅっ！」

あごを跳ね上げて絶頂の果てに痙攣しながら、射精するかのように両乳房から勢いよく母乳を噴き出し、失神してしまう少女。淫毒に染められた事でより感じやすくなり、また快楽に晒される事によって母乳が溢れやすくなってしまったのだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……はぁっ、はぁっ、はぁ、あ……んぅ……」

リバースの剣士になった四年前、同年代の子と比べて膨らんできていたとはいえ、自分の小さな手の平で隠せる程度だった未成熟なキャロンの胸は、ラモー・ルーの触手によって性的刺激を受け、子宮に刻まれた淫呪によって肉体の成長を急激に促進させられた。

一年前、マリオの身体を乗っ取ったラモー・ルーに犯された頃には身長が伸び、男の手の内にすっぽりと収まる程のサイズにまで乳房が成長していた。そしてその夜、ラモー・ルーの魔力に支配された村人全員によって一晩中犯されるという、ありえない性経験を経て、少女の肢体はより美しく、より淫らに成長した。

その後、人だけでなく魔物までもが少女の身体を狙う牡の列に加わり、尻穴、ＳＭ、多人数同時、レズ、道具、媚薬、巨根、種付け、魔術、触手など、あまりにも多様で豊富過ぎる性的経験によって、尻肉や太ももまでもが急速に成長して肢体は豊満で煽情的な曲線を描いて男の視線を誘い、乳房は男の手にも余るほどの媚肉でありつつもハリがあり、柔らかくも弾力に富んだたわわな果実になった。

まだ成人年齢に満たない少女であり、身長も低く童顔で、性格もまだ男っぽいところがあるために幼く感じられるが、その肉体は男の眼を釘づけにして離さぬ程の魅惑のプロポーションをしている上に、男を惹きつけてしまう魔性を帯び、娼婦以上の性経験を持っているという、極めてアンバランスな成熟をしてしまっているのだ。

その身体を彩る肉の豊かさに反し、その肌は性的接触に極めて敏感で、犯され続ける過程で開発され、彼女の体を狙う男たちの間で共有されて有名になってしまった性感帯も数多く存在する。そして今回、蛇に乳腺を犯されて淫毒に染められたことで乳房は更に開発され、淫靡に育ってしまったのだ。

「おっぱいの中を蛇に犯されて、母乳を吹き出しながら絶頂するなんて、貴重な体験よ、キャロン。これっぽっちも羨ましくはないけれどね」

サラの嘲る声にようやく目を覚ます少女。意識を失っていたのはほんの一時だったようで、汗も引いていなければ、股間を濡らす蜜も、乳房を濡らす母乳も乾いてはいなかった。自分が母乳を吹いて果てたことを思い返し、恥ずかしさのあまり赤面するキャロン。

「はぁ、はぁ、はぁ、うそ……おっぱいでイっちゃった？……はぁ、はぁ、んっ、は、いやぁっ、こんなの、恥ずかしい……おっぱい出て、感じちゃうなんて……」

キャロンが意識を失っていた間にサラは自慰を終えたのか、快感に火照った素肌を晒したまま、少女が吊られている側までやって来ていた。

「あら、もう起きたのね、ふふふ、貴女の乱れっぷり、充分に愉しませてもらったわ。キャロン……これで子供を産む準備は整ったわね」

「はぁ、はぁ、はぁ……え？……きゃ、痛っ、あっ、あくぅぅっ！」

意識がまだ朦朧として、サラが発した言葉の意味が呑み込めないキャロン。理解してはいけないと心がブレーキをかけているようでもあった。しかし、サラの手で乳房を強く揉まれると、母乳が噴き出てしまい、それが痛みでなく快楽であったことに驚いてしまう。

「よく聞こえなかったのかしら？キャロン。もう一度教えてあげる。貴女は今から、そのお腹の中に詰まった蛇を生むのよ」

サラの言葉を聞いてしまったキャロンの顔色が青くなり、鳥肌が浮く。その言葉を理解してしまうと、そのあまりの悍ましさに顔が青ざめる。出産、しかも蛇を。認識した途端に身体が震え出す。恐怖のあまり涙が溢れ、零れ落ちる。

「蛇は貴女の胎内に残った人間の精液と貴女の卵子を取り込んで、蛇自身の精液で染め上げたわ。その結果何が起こるかというとね……そう、受精よ。刺青に過ぎなかった蛇が実体を持つの。今、蜜を吸って増えに増えた蛇が一匹に集結して貴女の胎内に全て収まっている。これが肉体を持って今から出て来るの」

サラに耳元で受精という単語を囁かれると、少女の歯の根が合わなくなり、カチカチと音を立て始め、いやいやと幾度も首を振る。これまで何度か魔物を生まされたことはある。蛙、蟲、触手、卵、スライム等々。しかし、未婚の身である少女はその行為に慣れることはなかったのだ。潮を吹きながらの破水、子宮を内側から開かれ、産道を抉り、内側から犯しながら進む胎児。陰唇を内側から思い切り広げられ、絶頂しながらの出産。何より毎回、出産しながら絶頂してしまう自分こそが悍ましかった。

「キャロン。貴女あれだけセックスして、快楽をさんざん貪っておいて、妊娠は嫌だなんて甘えたことは言わないわよね？気持ちよく生ませてあげるから、諦めて出産なさい。貴女の胎内で出来た受精卵を呑んだ蛇だから……れっきとした、貴女の子よ」

「うぁ、あっ、あ、あぁぁ、そんなの、い、いや、お願い、ゆるして、いやぁっ……」

愉悦を隠そうともせず、サラは言いながらキャロンの膨らみ切ったお腹を優しく撫でる。その手から夜の魔力が伝わったのか、触れられている手の奥、子宮でどくん、と明確に脈打つ音がした。それは少女の脈音とは明らかに違うリズムと音色でゆっくりと、しかし着実に鳴り始めていた。それの意味するところを、彼女は理解してしまう。

「あぐぅっ！え、何？い、今の……何？あぐっ、う、ぐぅっ！うっ、うぅっ、あ、い、や、やめて、そんな、早すぎる、あぐっ、もう、来るの？いや、うぐ、んうぅっ！」

怯え、震え続けるキャロン。どくん、どくん、という鼓動は胎の中から次々に響きだし、徐々に大きくなってゆく。自分ではない何者かの心音が胎で鳴るたびに子宮がずくん、と疼き、肌がぴくんと反応してしまう。凌辱の限りを尽くされた少女の子宮は、胎動による僅かな振動だけでも快楽を覚えてしまうのだ。

「そうよ、魔物の胎児は母体の体液や魔力を吸収して育つから成長が早いの」

「うぁっ、お、お腹の中、響いて、だめ、だめなの……あっ、ぐ、くるしっ、は、破裂しちゃう……あぁっ！動いてる、うぐぅっ、いやぁっ、だめ、動かないでぇっ、あ、あぁっ！子宮叩いちゃダメぇっ！あ、熱い、あついのぉっ！お、おなかっ、くるしいっ！苦しいのに、感じちゃうっ、お腹の奥が、気持ち良くなっちゃうよぉっ！」

キャロンの胎の奥がまたどくん、と大きく跳ね、中にいる何かがゆっくりと動き始める。サラにお腹を触れられたことで彼女の持つ夜の魔力が胎の奥へと伝わり、胎児が目覚めたのだ。子宮の中で動かれるキャロンは内側から押される苦しさと、それに比例して際限なく増加してゆく快楽に歯を食いしばって呻き、幾度も首を振って喘ぐ。

「あっ、ぎぃっ！あ、あぁぁっ！う、うそよ、どうして？じ、陣痛が、気持ちいい？はっ、ぐ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、あぐぅ！な、中で、暴れて、んぁぁ！ひっ、ひっ、ふぅ……んっひ、いぃぃぃ！もうダメ、うっぐ、あぁぁぁんっ！こ、こわれちゃうぅっ！」

戸惑いを覚える間にも、どくん、どくん、という鼓動は胎の中で響き、大きくなってゆく。抵抗する手立ては既になく、子宮の中に巣食う何かを生むしか他にない。必死に息を整え、胎が裂けてしまわないようにするだけでも精一杯なのだ。苦しみ、喘ぎ悶えるキャロンをよそに、少女の胎の中のものは蠢きながら子宮口を何度も叩き、ここを出せと喚きたてている。

「ふふふ、赤ちゃんがママのお腹から出たくてしょうがないって暴れているわよ、キャロン。子宮口を拡げようと内側から何回も叩いて柔らかくしてゆくの。子宮口への刺激が気持ち良くてたまらないでしょう？ほら、諦めてさっさと生んであげなさい」

「あっ、あ、あぐぅぅっ！お、奥、開いちゃう、あ、うつぐ、はぁっ、はぁっ、あぁっ！気持ち、いいっ、子宮口から、溢れて、きちゃう、いやぁっ、だめ、ゆるして、おねがい、あぐっ、うっ、く、おっ、おなか、苦しっ、うぐっ、あぁ、もう、だめぇっ！」

胎を埋め尽くし、限界まで膨らんだ物に子宮口を内側から叩かれて苦悶の表情を浮かべ、同時に子宮口のポルチオに響く魔悦に感じて歓んでしまい、絶頂しながら悲鳴をあげるキャロン。ラモー・ルーに刻まれた淫呪によって、どれだけ精液を注がれようと人間の子を孕む事は無いが、魔物を出産した経験は幾度もあるという矛盾した経験を持つ少女は、逃れようのない出産の瞬間が近づいていることが理解できてしまう。家畜の出産に立ち会った経験すらないというのに、少女はたった一人でこの現実を受け止め、今から望まぬ出産をしなければならない。

「あぁっ！と、止まらない、子宮が拡がって、うぐっ、痛いのに、苦しいのに、どうして？お、お腹の奥が、疼いて……だめ、そんなの、だめぇっ、あぐ、も、もう、だめぇっ、あ、あふれちゃう、う、あっ、ひ、子宮、開いちゃう、あぁっ、うぐっ、んうぅぅっ！」

キャロンが一際大きく呻き声をあげると、触手によって大きく広げられた股間から、絶頂の潮と同時にぶしゃあっ、と水が噴き出す。子宮内に詰まった大量の羊水が溢れて破水したのだ。そしてあろうことか、破水した瞬間、少女は股間から溢れる羊水の感触に快楽を感じてしまっていたのだ。

「あ、あぁっ、う、うそ、気持ちいい、破水して、イっちゃうなんて、あ、は、あぁ、あぁぁ、いや、あ、う、動いてる、ダメ、出て来ちゃ、ダメぇっ！し、子宮が動いて、押し出されちゃうっ、いや、あぁっ、ダメ、ダメなのに、何で、気持ち良くなっちゃうのぉっ？あぁぁっ！子宮口が、あぐぅっ、開いて、はぁ、うっぐ、んああぁっ！」

「ふふふ、破水したわね。胎児が漬かっていた羊水には蛇の淫毒がたっぷりと入っているから、産道を少しずつ胎児が進むたびに至上の快楽を味わえるわ。良かったわね、キャロン。人間の出産なんて長くて苦痛ばかりだというのに、魔物の出産は短時間で、しかも産みながらイけるのよ。幸せだと思わない？」

傍らでサラが嗤っているが、キャロンは言葉を返す余裕もなく、息を荒げて叫び続けている。淫毒混じりの羊水が逆った膣道と陰唇は淫毒によって汚染され、胎は燃えるような熱さと疼きを生み続けて少女の肉体を苛み続けている。収縮が始まった胎から実態を持った胎児が出て来て、産道を犯しながら踏み荒らすのだ。それを想像しただけでも少女は快楽への確信によって早鐘のように胸が高鳴ってしまう。

「あぁっ、うっ、こ、こんなの、ヘンっ、あっ、そこ、い、子宮口に、うぅっ、んぐ、あっ、ダメ、んぅぅっ！はぁ、はぁ、はぁ、うぐっ、な、中、通るたびにイっちゃ、あぁぁっ！あ、やっ、はぁっ、はぁっ、だめ、これ以上、されたら、あうぅっ！か、感じすぎて、癖になっちゃうっ、んぐぅっ！こんなの、おかしくなっちゃうっ！」

胎児が子宮口を掻き分けながら産道をゆっくりと降りて来る感触に震えながら喘ぐキャロン。涙を溢れさせ、ちぎれんばかりに首を振り、喉が裂けるほどの声で悲鳴を上げ続ける。しかし、それが苦痛ではなく快楽によるものであるという事実がキャロンの心を汚染してゆく。少女は今、胎児に膣道を犯されて感じてしまっているのだ。

「産みたくない、産みたくないのにっ！あぁぁぁ、イク、だめ、気持ちよくなっちゃダメなのにっ、あぐぅっ！う、動いてる、んあっ！い、いや！もうあたし、イっちゃう、苦しいのに、あぁっ、あたし、出産しながらイっちゃうよぉっ！」

出産による極限状況での快楽に打ちのめされ、喘ぎ続ける少女。蛇に犯された乳首からは少女が絶頂するたびに母乳が溢れており、汗まみれの肌は松明の灯りを反射して照りを帯び、振り乱される髪からも汗が飛び散っている。広げられた股間からは愛液と精液と羊水が混合した液体が幾度も溢れては床の水たまりを拡大している。

「あっ、だめぇっ、あ、あたま、が、あぁぁっ！おおきっ、いっ、あぐっ、入り口、あぁぁっ！イっちゃ、うぐっ、っは、あ、はぁ、はぁ、はうぅっ！だめ、ぐりぐりしないでぇっ！何度もイっちゃうから、そ、そこ、抉っちゃ、だめぇっ、あ、あぁっ！」

胎児の頭部が少女の陰唇から覗くようになると、嬌声は一際高くなった。胎児に内側から陰唇付近の性感帯を刺激されているのだ。今や快楽は少女の肉体全てを支配し、出産による絶頂を期待するまでになってしまっていた。

「あぁっ、ぐ、うぅっ、も、戻っちゃ、だめぇ、はぁ、はぁ、はぁっ、うっぐ、は、早く生まれて、でないと、あっ、あたし、もうダメ、壊れちゃうっ、あぁぁっ！きちゃう、イク、イっちゃうっ！あぁっ、あっく、イクっ、うあああああっ！」

胎児は少女の膣口を責めるかのように出入りを繰り返し、頭をぐりぐりと擦りつけて陰唇を徐々に開いてゆく。その行為は淫毒に染められた少女の肉体には苦痛よりも苛烈な愛撫となってしまう。少女は悲鳴と共に幾度となく絶頂し、止めどなく全身を貫く快楽の電流が脳を焼き尽くしてしまう。

「はっ、はっ、は、あああああっ！も、もうだめ、う、ああっ、はっ、はっ、うぐ、あっ、う、うぅっ、イクっ、は、ぐっ、もう、産まれ、そうなの、ああんっ、赤ちゃん、出ちゃう、あぁっ、ダメ、イっちゃう、はっ、ぐ、う、うまっ、あぁぁっ！はぁ、はぁ、はぁ、あぐ、ぐぅぅっ！はぁ、はぁ、んうっ、うぁ、あぐっ、あっ、んぁぁぁぁっ！」

「ほら、頭が出て来たわよ、キャロン。もうひと頑張りよ。闇の快楽に堕ちた身体でイキまくって、リバースの魔力を帯びた魔物の赤ちゃんを産みなさい」

キャロンの切迫した悲鳴と嬌声が部屋中に響き渡っている。傍らでは少女の姿をした闇の女王が満面の愉悦を顔に浮かべて少女を嘲笑っている。いつの間にか女王の側に控えていた鏡の魔物が、幾つもの鏡を並べて少女の妊娠から出産までの一部始終を記録していた。この記録もいつか、どこかの平行線上の世界で再生され、少女の心を苛み、肉体を淫蕩へ歪め、蜜の味を極上の物とするために使われるのだ。

「はっ、はっ、あぐ、うぅっ、はぁっ、で、出て来て、るうっ！あんっ、あ、や、入り口で、擦れて、あふぅっ、か、感じちゃうっ！だ、だめぇっ、あっ、あぁっ！またイっちゃう、んぐ、あ、うっ、はっ、はっ、あ、うっ、あう、ん、ふぐぅっ！も、もうダメぇっ！」

胎児の黒い頭が膣口から徐々に覗いて来ると、キャロンの肉体は絶望と至福、苦痛と快楽の区別がつかなくなっていた。肉体を無理やり押し広げられる苦痛に呻きながらも、陰唇や花芯への刺激に感じてしまい、何度もオーガズムへと達してしまっていたのだ。少女の心は早く生んで楽になりたいという気持ちと、魔物の子供を産んでしまうという忌まわしさと、胎を内側から凌辱される魔悦をもっと味わっていたいという昏い欲望が入り乱れ、今は暴走し続ける触覚にただ泣き叫ぶしかできることが無いのだ。

「はぁっ、はぁ、はぅ、あぁっ、あそこ、裂けちゃう！はっ、う、んうっ、んぐ、あぁぁんっ！イク、もう、イっちゃう！あたし、魔物の、あ、赤ちゃん産みながら、イっちゃうのぉっ！あぁっ、お、お願い、は、早く産ませてぇっ、あぐっ、う、いぎぃっ、う、産まれちゃう、あぐぅっ！もうだめ、死んじゃう！あ、があぁっ、イ、イク、んうぅっ！」

胎児の頭によって無理やり拡げられた膣口から、ぷしゃあっと血のような潮と蜜が飛沫を立てる。少女は出産の苦痛と快楽に錯乱状態になりながら何度も絶頂し、ぜえぜえという切迫した呼吸音と絶叫のような嬌声をあげながら胎児を排出しようといきむ。淫毒に塗れた胎児の頭が、限界まで拡げられて充血した少女の会陰を幾度も擦り、身体が裂けるかと思うほどの快感が少女の脳を焼く。手足を拘束する触手を引きちぎらんばかりに全身を引き絞り、一息ごとに出産絶頂へと駆け上がってゆく。

「だ、だめ、はぁっ、はぁっ、もう、あ、あたし、もう、あたしっ！いやぁっ、あぁぁ、きえちゃう、っ、あぁっ、あ、あたし、消えちゃうっ！んっ、あぁ、あ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、あぁぁっ！はぁっ、はぁ、き、きもち、いいっ……うぐ、んぐぅっ、はぁっ、イク、イクっ、あたし、赤ちゃん産みながらイっちゃう！あぁぁんっ、はぁ、あぁ、こわれちゃう、あぐっ、で、出る、んうぅぅっ！あぁっ、裂けちゃうっ、はぁっ、イク、イクうぅぅっ！あ、んうぅっ！あぁっ！赤ちゃん産まれちゃうぅっ！」

闇の快楽に身を染められ、出産の苦しみを快楽へとすり替えられた少女の官能地獄は遂に最終局面を迎える。胎児の頭は半分以上膣口から出てきており、もう一息という所まで来ていた。そして、少女の肉体の内側を駆け巡り、逆り続け、幾度となく絶頂させて来た悦楽の大波もまた、最高点に達しようとしていた。少女は牝の本能に支配されるままに叫び続ける。涙を流し、涎を零し、母乳を噴き、汗を滴らせ、愛蜜を溢れさせ、潮を吹き、出産と同時に訪れる絶頂を享受しようといきみつつ、背を反らし、あごを跳ね上げる。

「あうっ、産まれる、あっ、あっ、あぁっ！あぁぁっ！イク、イク、産まれちゃうぅっ！あぐ、あぁぁっ！だめ、あっ、イっちゃうぅっ！あぁぁ、きちゃう、もう、イクっ！あぁぁっ、止まらないっ、ああっ、イクうっ、あぐっ、産まれ、あうっ、イクうっ、は、はぐぅっ、イク、イクっ、うっぐ、うまれ、うぐっ、んあぁぁっ！あああああぁぁーーーっ！」

やがて、かつてないほど高く、長い、断末魔の叫びにも似た少女の絶頂の嬌声と共に、胎児の頭は膣口を潜り抜け、粘液をまとったグロテスクな黒い肉塊がずるるっと少女の股間から這い出し、そのまま床に広がる少女の体液……潮と羊水と母乳と汗と尿と愛蜜で出来た水たまりの中へ落ちる。それと同時にキャロンは全身を貫く快感に四肢を硬直させて、絶頂へ堕ちていった。魔物を出産しながらの絶頂というこの上なく忌まわしい状況であったのに反して絶頂の快楽はこの上なく深く、少女は悦楽に蕩けた微笑みを浮かべており、母親となった幸福を味わっているかのようにも見えた。

「あぁっ……ぁ……はぁぁっ、あ、かはっ……んんっ……はぁ、はぁ、あぁっ……」

出産による絶頂というかつて経験したことのない高みへ至ってしまった少女は、子宮の解放感を味わう事によってまた軽く絶頂してしまう。出産絶頂というありえない快楽に堕ちた少女は再び全身をびくびくっと痙攣させると失禁し、尿と潮をあそこから溢れさせて生まれ落ちたばかりの胎児へと浴びせてしまう。やがて大きく溜息を吐くと少女は力尽き、糸が切れた人形のように脱力すると、そのまま意識を幸福な闇の底へと沈めていった。

キャロンの意識が落ちた事を確認したかのように、今までびくともしなかった触手の力が緩み、宙吊りになっていた少女の身体をゆっくりと床へ横たえた。すると、いつの間にか少女の体液で出来た水たまりを吸い尽くしていた胎児が蠢動を始め、少女の身体の上へとにじり寄り、手をかけて這い上がってゆく。

胎児は少女の汗にまみれた肌を舐めるように這い、柔らかくもハリがある豊かな乳房の頂に辿り着くと、桜色に勃起した乳首を咥えこみ、短い手で乳房を揉みながら母乳を吸い上げ始めた。

「……んっ……はぁ、あ……はぁ、う……うん……うっ……あぁっ……」

胎児の口で乳首に吸い付かれ、母乳を飲まれる刺激に少女は無意識に反応し、呻くような声を漏らす。その行為は、少女にとって性感であると同時に多幸感も生んでいた。抵抗しないことを確認すると、胎児は幾度か乳房を入れ替えつつ母乳を吸い上げ、飲み続ける。少女の体液から芳醇な魔力を吸い上げ、自分の肉体を急速に成長させるために。

「元気な魔族の男の子よ、キャロン。ふふふふ、あはははははっ！」

悪魔の受胎凌辱によって絶頂の果てに意識を失って倒れ伏したキャロン。そしてその母体から魔力を吸い上げる魔物の赤子。その様を玉座で見下ろしているサラの高笑いが、深夜の忘れられた神殿にひとしきり響いていた。